

通坊市定関

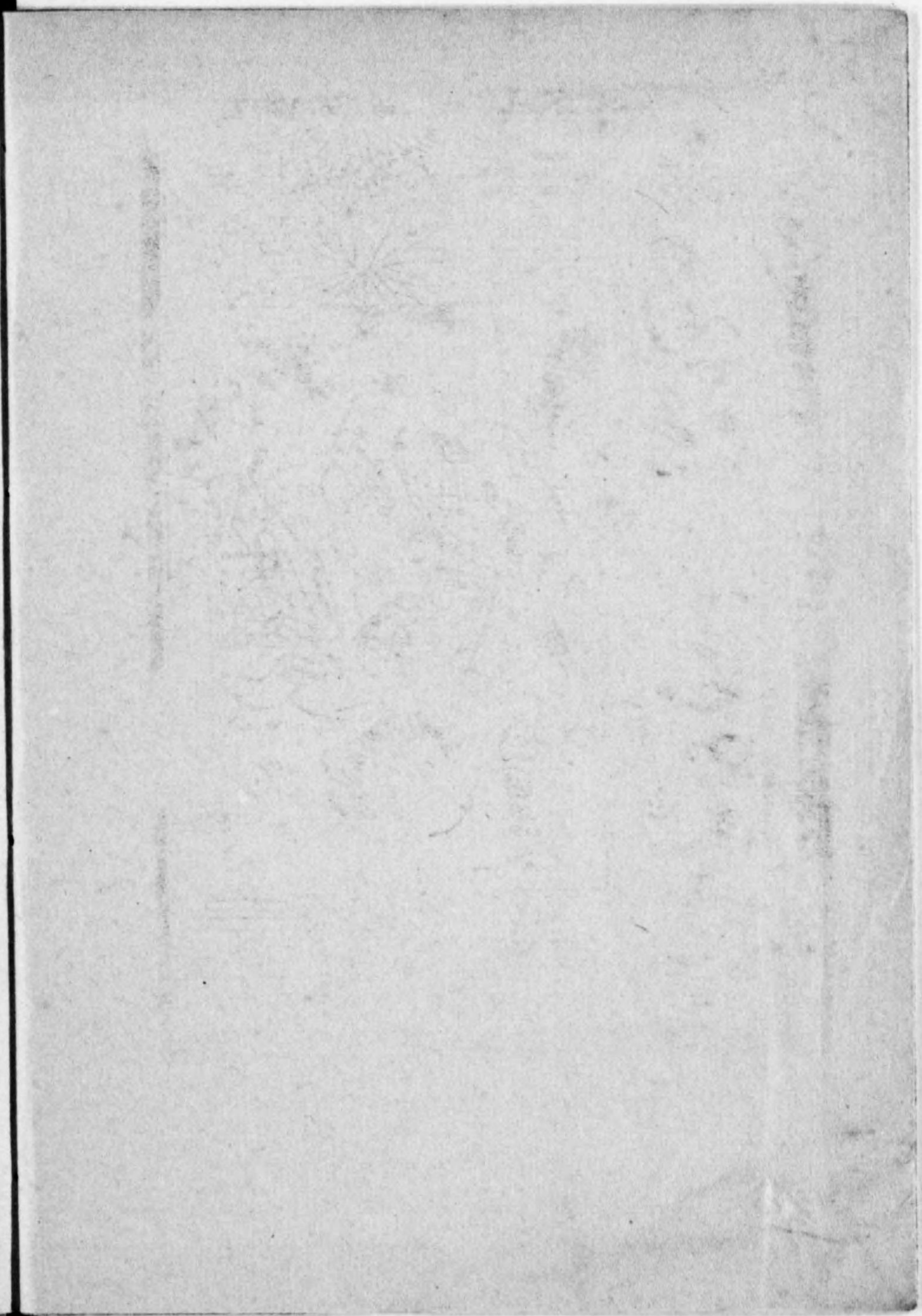
67-408
1200501281599

67
08



始





如三郎
文正

かやうにの若ハカガの風

のちがであそいさをも

新義流のあつふとにさ

せふふにより新義とのあつ

はかりしとあつとあつこ

わへつアツのこ

新義

まきし

あつとれあつ

新義きとととあつとあ

つあつとあつとあつとあ

とあつとあつとあつとあ

あつとあつとあつとあ

あつとあつとあつとあ

あつとあつとあつとあ





ついでに... かくれんぼ...
さる奴と... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...



かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...
かくれんぼ... かくれんぼ...





詞

とありまけあ
通塔安乞の歌

いせ







さるほろんちうの
 まりくひのちやこ
 うりちあてちう
 とちしよ
 るらあゆんひま
 うらうらちうら
 りてちうら
 あらうい
 んとみゆの
 あらう
 一とく
 一とく
 さくさあゆ
 まり



清長画

岸田杜芳作
 鳥居清長畫

通とほり
 増ます
 安あだ
 宅かの
 關せき

上か
 二冊

原本 東京 加賀豊三郎家所藏

通とまり増ます安あた宅かの關せき上

斯様に候者は、加賀の國富樫の何がしにて候、さても頼朝義經御仲不和に成らせ給ふに依り、判官殿主従、つくり山伏となりて、奥へ御下りの由、頼朝聞召し及ばれ、國々に新關を建て、山伏をか(た)く撰び申せとの御事にて候、此所をはそれがしうけ給はり、山伏を止め申候、いかに誰かある、今日も山伏の御通りあらば、こなたへと申候へ。(二丁オ)

旅の衣、篠懸のく、つゆけき袖やしぼるらん。

いかに辨慶、唯今旅人の申て通るを聞けば、安宅の湊に新關を建て、山伏を堅く撰ぶところ申つれ。

さては御下向を存(じ)て立たる關と存じ候、これは由々敷御大事にて候、これには飛んだ智恵の入りそいな事、駿州何んと、ぬしの腹はどう

だ。

智恵もひやうたくれも入らぬ、ぶんのめして通るの□、しば□候、仰せの如く、この關一ツ打破るは、安き事にて候へ共、それではあとが悪い、こゝがつらの入る所でありそうなものだ。

海尊師の仰せの如く、こいつは富樫めを、抱込む算段がよかるふ。

(二丁ウ、二丁オ)

富樫が組下、つかみしめ之亟、これ辨州、貴様とわれらがやうに打解て、御談じ申上は、腹藏なく御指圖致す、先づわれら明日關所で、つかゝりが飛んだ六つかしくいふは、所で貴僧が勸進帳だと名付け、何でも書いた物をひろちやくして、よい加減にこぢつけると、勸進帳だか、安針町だか、目をぬつたさぎ同前の者共だから、それと表向きは濟むのさ、しかし判官殿を、ひよつと見知つたものがあつた時は、面倒

だから、供の強力に身をやつしなどが面白かるうよ。

いやはや、とかく、つか見先生の御引廻しでなければ、われら主従、大の難儀、これは輕少の至りなれど、旅中の事ゆへ寸志ばかり、御蔭で心が隅田川、ひとたる金賣吉次が賣残りの品一包み、無寐ながら、せうの物をせうといふ所がいゝね。(二丁ウ、三丁オ)

辨慶、勸進帳と名付け、道中の小遣帳を高慢に讀上る、それつら／＼惟みれば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夜の長き夢を驚かす人もなし。

辨州めは、大の豪傑ものだぞ。

つかみ、山伏を一々吟味する、勸進帳がある上は、疑ひ晴れました、通してやりませう。

富樫の左衛門、しめ之亟が吟味を聞入る、人々の心底を察し、諸事吞込

みで、關所を通す、勸進帳の文句は、相の山といふものはへ。
つか見先生めは、きれしやだぞ。

あの山伏は大きな男だ、あとの強力は人柄のよい色男だ。

(三丁ウ、四丁オ)

義經主従は、しめ之亟と辨慶のうなづき合にて、何んのへんてつもな
く、安宅の關を越へ、喜びの餘りに、皆々酒盛をはじめ、辨慶御機嫌に
なり舞をまふ、なるは瀧の水、日は照るとも絶へずとうたりく、たへ
ずによろが、まことのこけよ、そつちも如才は無けれども、こつちの
ぼつぼに、一物がありそうで、ちよ／＼らいふだけ野暮らしい。とくと
くたてや、たつが弓の心ゆるすな人々と、笈をおつとり、肩に打懸け、
虎の尾を踏み、毒蛇の口を逃れたる心地して、陸奥の國へぞ下りける。
辨公はきつものだ。(四丁ウ、五丁オ)

靜御前は、義經の御あとを慕ひ、安宅の關所へ來懸り、大きに手古摺り
給ひけるが、これもしめ之亟へ、少々にぎ／＼の理屈を用ひ、やす／＼
と關を越へ、奥州へと急ぎ給ひける、やれ／＼うれしやく、ア、供の
者が見へそらなものじゃが。(五丁ウ)

通増安宅關下

夫より義經主従、夢の覺めるたる心地して、互におもてを見合せ、舌を
出して笑ひながら、奥州へ下り、秀衡が館へ案内し給ふ。

山伏が大勢連れで來たは、大江山と間違ひではないか、あゝ人くさい風
が吹くと、鬼ならば言ひそらな所だ。

山伏が澤山出ては、あとが附けにくい。(六丁オ)

私が吞込んだ上は、少しも氣遣ひ無く、山みちから、東海道鎌倉中は悴

共が一ぱいに付き合ひますから、どうでも仕様があらうなものさ、とかく長い物には巻かれるだから、げぢく／＼などもあやなして置くが智恵さ、さいわひ近日梶原父子が、松島見物にみへるによつて、よく吞込ませ、あなたと逆櫓のときの仲直りをさせて仕舞ひ、あとで静さまの娘道成寺で、おやぢめをぐつと、うはにして抱き込むは、どう御座ります。

とかくぬし達父子の、御指圖次第さ。

なんと、駿州、錦戸兄弟も餘ッ程通なもの。

貴公わしは、宗匠といふ身で、たいこを叩かずばなるまい、息子たちがみん(な)色男だは。(六丁ウ、七丁オ)

義經公も、撫附けをうつとうしがり給ひて、意氣めかせ給ふ、

先年逆櫓のあらそひ致した時分は、飛んだ無駄を申て、御氣にさわつ

た事も御座らうが、此義は幾重にも御流しなされて、自今は前々の通り御頼み申ス。

これはお互ひの事さ、今更おもへば不通の至り、此上は力味無しに、辨慶さんの力でも微塵も動かぬ、石山の秋の月ほど、まんまるな御附き合ひに致しませう。

とんだ洒落れるやつさ。

海尊げぢく／＼めも、つきあいて見れば、仲々わるい人でもない。

これから松島の別荘で、わつさりとたべませう。

先づ仲直りが済んで嬉しい。

げぢさんは、いつそ強い上戸だの。(七丁ウ、八丁オ)

花の都は、うたでやはらぐ、しき島原に、こん雲辨慶、白うん海尊。

べん子が身は、すごい物だ、二人の坊さまは雷子十町をよく吞込ん

だ。(八丁ウ、九丁オ)

梶原父子は、秀衡が待遇にて、陸奥の名所残り無く一見し、最早日數も重なりければ、人々に暇を乞ひ、鎌倉へ歸る時に、辨州鎌倉の御前向きは、われら能いやうに申なれど、義經公の身内におゐて、貴公は座頭株の事だから、それなりけりにもしくいによつて、御祝儀は千年貴公は衣川へ入水あつて、故人になられしと、萬八をいふて、證據に七ッ道具を、われら持參致し算段、しかし衣川才槌ばかり流れけりと申古歌もあれば、才槌は残し置き、残りの道具をもつてゆき、なに宜しう計ひませう。

何から何まで残る所は無い、飛んだ通だぞ。

お土産の品々は、陸奥の信夫文字摺、南部の片栗、松前の臘膈臍、金華山のきんこ、これはあとから船廻しで遣はしませう。(九丁ウ、十丁オ)

さるほどに、義經主従、秀衡親子が取持ちにて、梶原と和睦も濟み、鎌倉の御前向きは、梶原がちよゝらをもつて、さつぱりと納りければ、人々安堵の思ひをなし、蝦夷が島へ出店を出し、末繁昌に榮へ給ひけるこそ、まことにくめで度ぞんし參らせ候かしこ。清長畫。

(十丁ウ)

通増安宅關解説

木村拾三

□ 江戸三百年の間にあつて、無二の善政時代といはれた享保度は、賢將軍吉宗の治下で、いろ／＼の制度が全く整つたが、一面に幕府が信奉して來た朱子學は、狭苦しい倫理主義に局限され、このため却て世道人心の上に、大きな缺陷を生ずるやうになつた。この潮流に乗じて現れたのは、徂徠一派の折衷學である、かの『世説新語補』などを翻刻して、自ら風流才子を以て任じた、これが行渡つて、文筆に志すものが多くなり、謂ふ所の江戸文學の全盛期となつた。狂歌、川柳、小咄の外、こゝにはんとする黄表紙も、その一つである。

□ 子供の玩具繪本である赤本から發達した黒本、青本は、昔噺や武勇談、怪談等を主として脚

色したが、安永四年に、戀川春町畫作の『金々先生榮花夢』が出てから、その内容が一變された。それは初期の草双紙は、子供向きのものとして、表紙の色、貼外題、繪組などをのみ問題としてゐたのが、時勢の移るにつれて、内容作風の上にも大きな變化を來して、こゝにはじめて大人の讀み物、即ち黄表紙となつたのである。

黄表紙の名稱は、黄土(繪具)を塗つた表紙を附けたのから出たので、それが今日、書史學的にも用ひられてゐるのは、もとく内容の變化を示した手段から發生した名である。所がこの趣向はいたく時好にかなひ、作者の誰もがこれに追隨し、その本質は、洒落と、穿ちと、滑稽と、淡い諷刺と、軽い教訓とを織交せて成立つた。それが嵩じて、時の政治向きをも茶化しようとした。松平定信の革政を諷刺した『文武二道萬石通』(天明八年版)『朋誠堂喜三二作』や『天下一面鏡梅鉢』(寛政元年版)の如きそれである。その結果として幕府から禁止を命ぜられたが、その間を潜つて、教訓物、仇討物に再轉した、しかしその趣向が複雑するに従つて、漸く長編となり、トド文化四年から合卷(がくわん)の形式をとり、こゝに黄表紙の終局となつた。

江戸文學の一産物として、重要な位地にある黄表紙は、二千種近くも刊行された。それがど

んな状態で出版されたか、曲亭馬琴作の『物之本作者部類』に、

此時(天明寛政)に當りて、通油町なる地本問屋鶴屋蔦屋二店にて、毎春印行せる臭草紙は必作者を擇むをもて、前年の冬より發兌して、春正月下旬まで、二冊物三冊物一組にて一萬部賣れざるはなし、そが中に當り作ある時は、一萬二三千部に至ることあり、猶甚しく時好に稱ひしものあれば、そを抜出して別に袋入にして、又三四千も賣ることありといへり。その賣價のことも、同書によると、その初めは新板一冊物六文、八文、古板物は一冊五文。後には新板一冊八文、古板七文。寛政に入つて、新板一冊十文、古板八文であつた。また天明頃には、特に製本を美しく仕立、三冊を合綴して袋入にしたのを五十文、或は六十四文に賣つたと記してある。

かく盛行した黄表紙を、役者評判記に擬した『菊壽草』(天明元年版)『蜀山人作』『岡目八目』(同二年版)『江戸土産』(同四年版)作者未詳)が出て、これを品隔したので、いやが上に人氣をあほつた。山東京傳の如きも、實にこれによつて、世間に認めるやうになつたといはれてゐる。

しかし黄表紙は、民衆の觀賞に入つたとはいへ、決して貴賤上下の隔てなく、行渡つたとは

考へられない。前述の如く、繪本から出發したものに、畫面を第一主義とし、詞章をその餘白に書記したので、それだけに行文の簡潔、輕俊な洒落、その上に奇抜な趣向とを要した、苟くも豫備知識のないものには、猫に小判であつたらう。その體様は、讀むのを主とした上方小説と實質的の相異がある。が、その完成した作品は、何のこだはりもなく、肩の張らぬ讀み物として、一部の階級に歡迎されたことは、『物之本作者部類』の記事によつてもうなづける。

本書は天明元年の作で、山下町伊勢屋次兵衛版の上下二冊十丁物である。その頃は所謂田沼時代にあたり、權臣が賄賂をとる狀況を穿つたもので、その趣向を、謡曲の『安宅』に取り、關所を通り抜けるに、富樫の家臣つかみ占之丞を抱込み、また秀衡の館にて、梶原の松島見物をかこつけに探りに來たのを買収するなど、當時の上流社會が腐敗せるさまを、婉曲に取扱つてゐる。

その傑作であることは、天明二年に、蜀山人が、前年出版の黄表紙四十七部を批判した『繪判記菊壽草』の總目錄、「立役之部」に、

ほうび上上吉 通増安宅關 いせ次座

座頭株の辨慶が洒落は數年の幸四郎

とあり、その中卷に、

ほうび上上吉 通増安宅關 二冊

頭取「かやうに候ものは、かゞの國とがしの何がしが安宅の關、島のそらねより、はかりことは光次を以て貴しと、通りのよい印通、それゆへほうびをそへました、ひいき大にしてもよい位だ、はやく印通のしやれが聞たいく、頭取「此度むさし坊辨慶の役、たびの衣はすぐかけの謡の出、駿州なんとぬしのはらはなんとゝのせりふ、夫よりとがしが組下、つかみしめ之丞をだきこみ隅田川一樽、金うり吉次がうりのこりの品一包、ぶしつけながら、せうの物をせうといふ所、きつい事く、くはん進帳の文句は、あいの山といふもの、たはへも出來ました、わる口」とてももの事に、くはん進帳の文句に、おかしみの有りさうな事、

棒つき「通れ通れ、頭取「さてあたかの關をこへ、よろこびの餘りの舞の身ぶり、そつちも如在はなけれども、こつちのぼつぽに一物がありそうなどの歌、かんしんく、次に靜もしめの丞へ、にぎくのりつくを用ひ、義經かち原さかの出入も濟、梶原辨慶に向ひ、貴公は座頭かぶだから、御しう儀は千年衣川へ立往生の分とのあいさつ、何から何まで當世々々、

とあるので首肯される。

本書には作者名がなく、清長の畫作とのみ信じられてゐたが、水谷不倒氏が、その著『草双紙と讀本の研究』にをいて、天明三年版、四方山人作の、黄表紙評判記である『岡目八目』の、「實惡之部」に、『擲討鼻上野』を評した詞のうちの「ひいき杜芳さんきつものゝ古今にないあたらしいぞ、去年の御作のあたかより通ります」とあるを引き、岸田杜芳の作なることを發表された。即ちこの「あたか」といひ「通ります」といひ、正しく本書を指したので、これに由つて、從來杜芳の作は、天明二年を起點とする説を、更に一年繰上げることになつたのは、實に水谷氏の一大發見といはねばならぬ。されば安永八、九年、天明元年の清長の畫作とみゆるものに、或は杜芳の作があるかも知れぬと、附け加へてゐられる。

作者岸田杜芳は、その自作稿本『繫升三升繫』(式亭三馬舊藏、のち松廼舎文庫に歸す)に、門人櫻川慈悲成が、三馬の依囑で、故人の肖像を畫き、その左傍に「天明比芝櫻川三島町居住、表具師岸田豊次郎」と記しあるが、この原本は、大正癸亥の震火で亡失したので、いまは稀書複

製會本によつて、その面影が見られるが、颯爽たる風姿は、その人の作風さへも窺はれるのである。狂名を言葉の綾知とといひ、天明八年五月歿した、その年齢は詳かでないが、畫像を見ると五十歳前後の人らしく思はれる。

杜芳作の黄表紙は、現在二十七種が數へられ、これに與かつた畫工は、北尾政演十一種、同政美、鳥居清長六種、勝春山國信、千代女、三蝶、歌川豊國が各一種となつてゐる。

畫工鳥居清長、もと相州浦賀の生れで、若くして江戸に來り本材木町一丁目、白木屋といふ書肆と、家主を營み、通稱を關口市兵衛(又は關新助)といつた、畫を鳥居清滿に學び、天明五年師の歿後、鳥居四代を相續した。その清新な畫風は、その頃の草双紙錦繪に影響を與へ所謂清長風の流行を見るに至つた。

清長は畫家として名手であるばかりでなく、戯作にも長じ、安永四年といはるゝ『風流物者附』以下三十種ほどのものが、その作といはれてゐる、本書もその畫作と誤傳されたのも、畢竟はこの理由からであつた。殊に際物や流行唄を取込んだのが特色で、力持柳川ともよを脚色した『近代金平娘』など、その最も著名なものである。

67
408

第 限
定 版
號 版

昭和十年五月十八日印刷
昭和十年五月二十四日發行

清長 畫
（原書黄表紙三種ノ内）
通増安宅關與附
定價 七十錢

東京市澁橋區東大久保二丁目二百廿番地
編輯者 圖 說 復 版 會

代表 木 村 捨 三
東京市神田區須田町一丁目七番地
發行所 巧 藝 社

電話神田二二九四番
振替東京四〇六六六番
東京市京橋區西八丁堀一丁目四番地
印刷所 巧 藝 社 印刷所

晩年は草双紙に筆を絶つて、専ら芝居繪看板、錦繪に従事したのか、寛政以後の挿繪物に接することが出来なくなつた。文化十二年五月二十一日歿、年六十四歳、法名長林英樹居士、本所回向院に葬つたが、いまその墓は無い。（昭和十・五・一）

なほ本書と同時に複版發行せる黄表紙「兒訓影繪噺」同「色男其所此所」芝居繪本番附「大鍔海老胴篠塚」は、いづれも清長研究に、必須なる資料であるから参照せられたい。

終

